

[優秀賞]

富橋 芙美さんレビュー (秋田市)

書評対象図書

朝井 リョウ 著『正欲』(新潮社刊)

ありのままでいい、わけないけど繋がりたい

「ほかの人が当たり前に出ることが、どうして自分には出来ないんだろう」と思うことが多々ある。その悩みの究極を見た気がした。性的指向に関して誰にも言えない秘密を抱える、寝具店の販売員・夏月、大手食品会社に勤める佳道、ダンスサークルに所属する大学生・大也。世間が言うマイノリティにすら当てはまらない彼らは、まるで地球に留学しているような感覚で生きている。

三十代半ばとなった夏月の周囲で繰り広げられる話題は、恋愛、結婚、妊娠、出産。それらに興味があって当たり前という環境下で、当事者になり得ない夏月は、孤独も虚しさも憎悪も飼い慣らして平静を装っていた。そんな中、世間では「多様性」が謳われ始め、本来救いとなるはずのその言葉は、マジョリティ側により都合良く発信されるだけで、むしろ夏月を追い詰める。

自分に正直に、マイノリティに理解を、新しい価値観に対応して……。それが正しいと疑わず声高に叫ばれる昨今だが、自分の根の部分に悩み苦しむ夏月たちを見ると、ありのままでいいなんて簡単には言えない。礼賛される言葉の側面を考えさせられる。

中学の同級生である夏月と佳道は、同窓会をきっかけに手を組む。左手に指輪を付け、公園で二人にとってのデートをし、慣れない体勢に戸惑いながら擬似セックスを試みる。皆が当たり前に行っていることを体験してみたいと望む二人がいじらしい。同じ特殊性癖を持つ者同士は、繋がることで初めて生きていたいと思えるようになり、生き抜くためのさらなる繋がりを求めSNSを開設する。

夏月たちに寄り添ったつもりで読み進めていたが、「お前らの言う理解って結局、我々までも側の文脈に入れ込める程度の異物か確かめさせてねってことだろ」という大也の叫びで気が付いた。恐らく、自分の思考は「まとも側」のものだ。現に、大也が欲求を満たすために取る手段に対して、公然と賛同はできない。それでも、否定せず、干渉せず、ただ共に在るという「多様性」がこんなにも難しいのかと、やるせなさが募った。

物語におけるもう一つのキーワードは、序盤で綺麗事のように映っていた「繋がり」だ。しかし、夏月たちの救いとなった繋がりは、広がるにつれて世間的には厄介なものとなる。自分は夏月側と「まとも側」のどちらに立っているのか、誰もがありのままでいられる世界は本当に正しいのか。読了後はきっと誰かと語り合いたくなるはずだ。